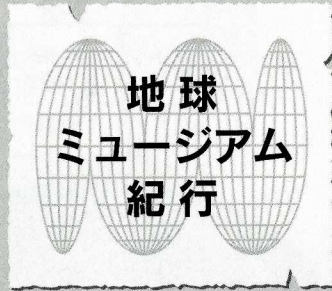


アパルトヘイトの記憶

飯田 卓 (いいたく)

本館研究戦略センター



ヘクター・ピーターソン博物館、
アパルトヘイト博物館／南アフリカ

博物館をめぐる近年の動きを理解するうえで、「記憶」というキーワードは重要である。記憶というのは、本来は個人的な体験に基づくものだ。しかし、ある種の記憶は、継承され、人類の共有財産となる価値をもつ。そこで、博物館がその役割をはたそうというわけである。

実際、博物館のはたすべき役割は大きい。個人の記憶は、色あせた写真や身近な持ち物、日記や手記、当時の新聞やニュース映像など、さまざまなモノに託される。これら多様な「資料」をそっくり展示できる点で、博物館というメディアは、今もつてすぐれた機能を発揮するのである。

とはいえ、実際の展示では、個人の記憶を社会的なものにまで高めることは難しい。えてして、どこにでもありそうな日用品を並べるだけで終わってしまう。うまく観客の関心をひいたとしても、他人の私生活を覗き見させただけ、ということになりかねない。

この点、アパルトヘイトをテーマにした博物館は、国家や歴史の冷徹さを観客に実感させる力がある。同じような感覚は、アメリカのホロコースト博物館を訪れたときに感じた。あまりにも大きなうねりが、個人の尊厳を呑み込んでしまうような状況。それを理解するためには、かえって、個人の日常にまで焦点を絞っていくのがよいのだろう。

ヘクター・ピーターソン博物館は、ヨハネスブルグ市郊外で一九七六年におきたソウエト蜂起をテーマとしている。この事件そのものは、当事者にとって、非日常的だったかもしれない。しかし、博物館で展示されている当時の落書きなどは、日常的な静けさのなかで書かれたであろうにもかかわらず、その日常が観客にとってはきわめて異常だったことを示している。

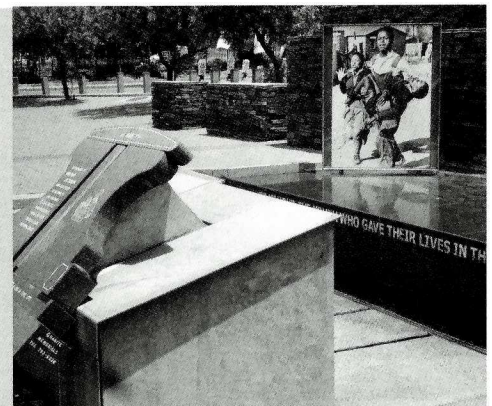
抗議し、ついには大規模なデモ隊と警官隊が衝突した。ヘクター・ピーターソンは、そのときの犠牲者六人のうちのひとりで、死亡時にまだ二三歳だった。

一方、アパルトヘイト博物館があつた時代は、もう少し広い。ヨハネスブルグが鉱山の町として発展する一九世紀末から、マンデラ氏が大統領として選ばれた一九四四年ごろまでを対象としている。建物の玄関にいたる屋外通路には、さまざまな肌の色の人たちの等身大写真が置かれている。ところが、彼らは無名の人たちではない。博物館の一室には、彼らの身に付けていた所持品が、

履歴や手記などとともに展示されている。それを見る観客は、かくも多様な人たちがアパルトヘイトの現実を耐えてきたことに、あらためて驚かされる。

屋外通路の写真をさらに写真撮影し、帰宅後に見なおしてみても、さらに驚いた。等身大の写真は、じつは大きな鏡に貼りつけてあったのである。わたしは、他者の肖像を撮影した気になっていたのだが、そこには、わたし自身が写り込んでいた。ひよっとすると、アパルトヘイト博物館で見たものは、ほかならぬわたし自身の現実だったのかもしれない。

ソウエト蜂起のきっかけは、白人たちの母語のひとつを政府が学校教育のなかで強制しようとしたことにある。これに対して、黒人学生たちは登校拒否によって



ヘクター・ピーターソン博物館の
近くにあるモニュメント

アパルトヘイト博物館の屋外通路。
展示の語り部の後ろには、わたしの姿が
写り込んでいた



アパルトヘイト博物館の入り口。
白人用と黒人用がある

